

カトリック信徒の移動

——類縁性とモダニティ——

叶 堂 隆 三

目次

はじめに

1. 信徒の農村間移動に関する基本的視点
2. 信徒の移動の社会的特徴
3. 日本の近代化と長崎の信徒の開拓移住

はじめに

長崎の半島・離島出身のカトリック信徒の移動に関する一連の研究では、江戸後期以後に生じた集団的・連鎖的移動の実状を把握し、その社会的背景と特徴の解明をめざした。本稿では、第1節で一連の研究の基本的観点を確認する。第2節で長崎県内外の信者の集住地の事例調査から得られた知見を通して、一連の研究の基本的観定の検証およびその社会的特徴の解明をめざす。最後に第3節で日本の近代化という観点から、長崎の半島・離島出身の信徒の移動を検討し、近代性と前近代性が混在する状況と内容の整理を試みることにしたい。

1. 信徒の農村間移動に関する基本的視点

表1は、長崎の半島・離島出身の信徒の集団的・

連鎖的移動の時期区分および一連の研究の基本的観点に含まれる想定である。

まず1の信徒の移動の時期区分に関して、江戸後期以来の集団的移動を第1期から第4期に区分した。

第1期は江戸後期に発生し、長崎市外海地区から五島・黒島・長崎市の半島・島嶼・山間地等に移動したものとした。その後の移動は、外海地区および各移住地から発生したものと推測した。第2期は江戸末期・明治初期の平戸島・北松浦半島等への移動、第3期は明治中期以後の佐世保市および教役者主導の開拓移住地等への移動、第4期は大正・昭和初期以後の国の開拓事業や国の政策による集団移住等とした。

次に2の集団的・連鎖的移動の目的に関して、信徒の移動の目的は営農を志向する開拓移住・農業移住であったと想定した。一般に、長崎の信徒の居住地・集住地に関して、16世紀以来の信仰が守られてきた地、逃散によって居住地が形成された地、山間地や離島に無住地があって密かに移り住んでいた地という思い込みが流布している。しかし江戸時代、所有者のない場所や誰も知らない場所は存在しない。そのため一連の研究では、藩の開拓政策や農

表1 長崎の半島離島の信徒の移動

	移動の内容	移動に関する想定	明治以降の日本の移動の特徴・趨勢
1	移住の時期区分	第I期（江戸後期）～第4期（昭和戦後期）	近代化とともに地理的移動の増加
2	移動の目的	農業（開拓・農業）	第1次産業から第2次産業等への社会的移動
3	移動の背景	零細な生産状況（均分相続・過剰人口） 農業志向	直系の相続と傍系の出出 第1次産業および第2次産業等間の産業間格差
4	移動の特徴	挙家・就業的・連鎖的 コミュニティ志向・社会資源・政策の関与	離家離村 向都現象・日本の産業（工業）化政策
5	移住地の地域状況	同郷関係性・移住地の規模 移住地の生産条件・土地所有状況・生産基盤の転換・都市化・産業化	一部に同郷者の組織化・集住化の発生 職住分離・雇用労働等の生活構造

地・山地の購入に基づく移住や小作移住であったと想定し、その状況の把握をめざすことにした。

第3の信徒の移住が生じた社会的背景として、過剰人口（世帯）を要因に想定した。さらに過剰人口は、長崎の半島・島嶼の信徒の間で行なわれていた均分相続慣行および多子傾向に由来すると想定した。とりわけ江戸末期・明治初期以降、多子状況が恒常的に生じ、均分相続慣行と相まって生産地の狭小な零細世帯が急増したと推定した。

また、第4の信徒の移住の特徴として想定したのは、まず集落内に創出された分家あるいは本家の世帯全員および多数者による他出という形態である。すなわち挙家離村による開拓・農業移住を零細規模の農業および漁業等との兼業という生活形態から脱却し、安定した農業経営を実現するための数少ない家族・地域戦略と想定した。次に類縁関係・親族関係・地縁関係といった社会関係で結ばれた世帯が集团的・連鎖的に移動すること、こうした移動によってさらに移住地にコミュニティを形成しようとする志向性を想定した。加えて、明治中期以後の移住の場合、類縁関係等の社会資源（外国人神父・修道会）や国の地域政策（開拓政策・過疎対策）が関与する移住が含まれる可能性も想定した。

最後に、第5の移住地の社会状況として想定したのが、移住地の規模（面積）等によっては移住地内に同郷関係等による分節化が生じること、また生産財（農地）の所有に関して、後発の移住の場合、小作等の状況が生じる傾向があると想定した。さらに移住地が狭小および不利地の場合、生産基盤が農業から漁業等に転じる可能性があることを想定した。

2. 信徒の移動の社会的特徴

まず、表1の項目のうち1移動の時期区分および2移動の目的に関して、次に3移動の背景および4移動の特徴に関して、一連の研究における事例調査の結果を整理していく。さらに5移動地の地域状況に関して、草分けの世帯の移住後の移住地および周辺地域の社会状況とその変化に焦点を当てて事例調査の結果を整理していく。

移動時期の区分

表1の1信徒の集团的移動の時期区分に関して、

表2に示した事例調査の状況によって、五島・佐世保市黒島・長崎市小櫛・伊王島・善長谷への移住が江戸後期であると確認できた。また平戸市（平戸島中南部）のうち木場地区（田崎・神鳥）も江戸後期の移住地であることが判明した。その結果、これらの集团的移住を最初の移住（第1次移住）に位置づけることができると判断した。

また、北松浦半島の佐世保市神崎・禰崎、平戸市（平戸島北部・中南部）等への移住が、江戸末期および明治初期であったことが確認できた。そのうち神崎・禰崎は第1次移住地の五島および外海（神崎）等からの移住、平戸島北部は第1次移住地の五島・黒島からの移住、平戸島中南部は第1次移住地の五島・黒島および外海・浦上（木場）等からの移住であることが判明した。そのためこの時期の集团的移住の大半が外海地区および第1次移住地からの移住であり、第2次移住に位置づけられるものと判断した。

さらに、明治中期の北松浦半島の平戸市田平および大村市竹松、平戸市（平戸島中南部）の木ヶ津坊主畑西側等への移住が明治中期の外国人神父主導の移住であること、明治中期の佐世保市中心地区（北部）への移動が営農を目的としていたことが判明した。また初期の田平および竹松への移動は黒島・外海から、坊主畑西側は外海からの移住であることが判明した。そうしたことから教役者主導と信徒主導の移動が含まれる集团的移動は、第3次移住に位置づけることができると判断した。

その後の大正・昭和期以降に生じた集团的移動のうち佐世保市の各地区への移動が営農目的であったことが判明した。また長崎県外の宮崎市田野町法光坊・福岡市西区能古島大泊が国の開墾助成法に基づく開拓移住地であること、行橋市新田原東徳永が教役者の関与する開拓移住であること、平戸市（平戸島）の千代切山、佐世保市曾部ヶ崎・牟田の原・烏帽子、小佐々町横浦、大村市の旧軍用地・松尾集落が自作農創設特別措置法に基づく開拓地・農地であること、新上五島町青方（折島・樽見・熊高の各団地）が過疎対策特別措置法に基づく移住地であることが判明した。こうした状況から、大正・昭和期以後の集团的移動は国の政策が関与する集团的移住を第4次移動に位置づけることができると判断した。

表2 信徒の移住地の状況

市町名	地理的状況 ・地区名等	地区・集落 等名	移住時期				移住後の状況		市町名	地理的状況 ・地区名等	地区・集落 等名	移住時期				移住後の状況	
			江戸 後期	江戸末期・ 明治初期	明治中 後期	大正・昭 和初期	昭和 期	移住 目的				分家 創設	江戸 後期	江戸末期・ 明治初期	明治中 後期	大正・昭 和初期	昭和 期
新上五 島町	小離島	折島	○	五島内移動			○	平戸市		田平			○		○		
	半島	樽見・熊高		○	五島内移動		○	佐世保市	北松浦半島	加勢			○				
	中通島	青方(折島 ・樽見・熊 高の各団地)		○	五島内移動		○	小佐々町		横浦					○		○
		津和崎半島	鯛ノ浦	○				○	大村市	竹松・西大村			○				○
佐世保市	離島	黒島	○			○		諫早市					○			△	
長崎市	小禰	神ノ島		○			○		中心地区(北部)	烏帽子					○		○
	伊王島	馬込・大明寺	○				○		相浦地区(浅子)					○			○
	山間地	善長谷	○				○	佐世保市	船越地区						○		○
		大山	北部			○			崎辺地区						○		○
平戸市	平戸島	千代切山・油 水・長崎山					○		大野・皆瀬地区	牟田の原					○		○
		中南部	○	○			○	宮崎市	田野町	法光坊				○		○	○
	平戸	(木ヶ津 坊主畑)		○	○		○	福岡市	西区	能古島六泊					○		○
		平戸				○			城南区	茶山					○		○
佐世保市	北松浦半島	神崎			○		行橋市	新田原	東徳永等					○		○	○
		禰崎			○										○		○
		曾部ヶ崎															○

注：諫早市の移住目的の△は、農業以外を含むことを示している。

連鎖的移動

また、移動時期の区分に関連して、事例調査を通して、最初の信徒（草分け世帯）の移動後に多くの移住地およびその周辺で連鎖的移動が生じたことが

判明した。表3の長崎市の小湊地区の場合、神ノ島から対岸の半島に位置する小瀬戸・木鉢に來住世帯の居住が進展し、五島・平戸出身の世帯が來住する。伊王島地区の場合、第1次移住地の2つの集落

表3 連鎖的移動

市町名	地区	町・集落等	地区内の移住順	移住時期				草分け（出身地等）	その後
				江戸後期	江戸末期・明治初期	明治中後期	大正・昭和初期		
長崎市	小湊	神ノ島	1		○			漁業世帯	旧佐賀領の世帯
		小瀬戸	2			○		外海・陰ノ尾島	
		木鉢	3				○	外海・陰ノ尾島・五島・平戸	
	伊王島	馬込・大明寺	1	○				外海	
		一本松	2		○			島内からの移住と來住世帯	
		善長谷（上）	1	○				外海（堅山）	
深堀	善長谷（上・中・下）	2			○		五島・大山		
	大山（上）	1		○			外海（黒崎）		
小ヶ倉	大山（中・下）	2				○	先住世帯と親族関係		
	平戸						平戸島中南部・五島・外海		
平戸市	田平	田平	1			○		黒島・外海	
		平戸口	2			○		五島・平戸・田平	
松浦市	西木場		3			○		平戸・五島・黒島	
		竹松	1			○		外海・長崎・黒島・五島	黒島・五島・平戸
		西大村	2			○		黒島・五島・平戸	
大村市	丘陵地 旧軍用地・開拓地		3				○	新規移住世帯	
			4				○	黒島・外海・五島	
		大潟・相浦	2			○		黒島・平戸・西彼大島	褥崎他
		大崎	3				○	黒島	五島
佐世保市	崎辺	浅子	1			○		田平	炭鉱従業世帯
		天神	-				○	黒島・五島	
矢岳	神崎		-				○	五島・外海・田平・平戸島	黒島・褥崎

の中間の開拓地（一本松）に島内の2集落の分家とともに島外からの世帯が来住する。深堀地区善長谷および小ヶ倉地区大山の場合、初期の移住地（善長谷上）に加えて中・下側に五島等から世帯が来住している。

平戸市田平地区の場合、田平の周辺の平戸口（永久保・野田・岳崎等）に来住世帯の居住が展開し、さらに松浦市西木場等にまで居住が拡大する。平戸口・西木場への来住世帯は、田平からの分家に加えて五島・平戸・黒島等の出身世帯である。大村市の場合、竹松・西大村に長期的に世帯の来住が生じ、その後、丘陵地および自作農創設特別措置法の旧軍用地・開拓地に黒島・外海・五島等から世帯が来住している。

佐世保市相浦地区の場合、浅子への移住の後に大瀨・相浦、さらに大崎で黒島・平戸等からの来住世帯の居住が生じる。神崎の場合、生産が水産業に転換した後、神崎およびその周辺に来住世帯が生じる。

このように、信徒の移住地では草分け世代の移住後、比較的長い期間にわたり、後続の信徒の連鎖的移動が見られるのが特徴といえよう。

移動の目的

また、表2の移動後の状況の項目の移住目的に丸印を示した地区・集落等は、事例調査を通して、開拓および営農志向の集団移住が確認された場所である。

第1次移住地の五島・黒島および長崎市内の神ノ島・伊王島・善長谷・大山等は、五島藩・平戸藩・佐賀藩の関与する開拓地や購入の開拓地であることが判明した。第2次移住地の北松浦半島の佐世保市神崎・褥崎・平戸市（平戸島北部の上神崎・中南部の京崎）等への移住も松浦藩の牧場跡への開拓移住であること、平戸市（平戸島中南部の紐差・古田等）が新田開発に伴う農業移住であることが判明および推定できた。

さらに、第3次移住のうち平戸市田平・大村市竹松・平戸市（平戸島中南部の木ヶ津坊主畑）への移住が明治中期の外国人神父主導の開拓移住であること、明治中期の佐世保市中心地区（北部）への移動が営農目的であることが判明した。その後の佐世保市中心地区（北部）への移住も営農志向であったことも明らかになった。

第4次移住のうち佐世保市の船越・崎辺（天神）および大野・皆瀬（産炭地を除く）への移動が、実は、営農目的であることが判明した。また長崎県外の宮崎市田野町法光坊・福岡市西区能古島大泊、平戸市（平戸島北部の千代切山）、佐世保市曾部ヶ崎・牟田の原・烏帽子、小佐々町横浦、大村市の旧軍用地・松尾が開拓移住地であることも判明した。加えて、行橋市新田原東徳永が教役者の関与する開拓移住地であることも明らかになった。

なお、表3の連鎖的移動が生じた地区・集落等に関して、長崎市小瀬地区の小瀬戸は営農志向の移住地であったものの、長崎市の都市化・産業化に伴い木鉢および深堀地区善長谷・小ヶ倉地区大山の下側は非農業世帯の来住地に転じている。また佐世保市の船越・崎辺（天神）および大野・皆瀬、宮崎市田野町法光坊への初期世帯の移住後の来住（後発的移住）は、佐世保市および宮崎市（清武地区）の都市化・産業化に伴う非農業の世帯の来住が大半となっている。

さらに佐世保市加勢および北松浦半島の山間地への移住が炭鉱労働を目的とするものであったこと、新上五島町青方（折島・樽見・熊高の各団地）への移住が過疎対策特別措置法に基づく移住であったことも判明した。

すなわち、初期の移住の目的は大半が開拓および営農志向であることが明らかである。しかし多くの移住地では、その後、長期的に連鎖的移動が生じる。その結果、営農を志向しない来住の信徒世帯が一定数、さらに多数を占めるようになったといえよう。

集団的移動の背景

長崎の半島・離島出身世帯の移動の要因として想定した①条件不利性・②均分相続・③過剰人口に関して、事例調査を通して判明した状況の一部を示したものが、表4および表5である。

① 条件不利性

条件不利性に関して、最初の大規模な移住（他出）が発生した長崎市外海地区は、山地が海に迫る地形の半島である。その後の移住地に関しても、第1次移住地の黒島・五島（折島）は離島・小離島で、平地が少なく生産地（農地）が限定されていたこと、第2次移住地の神崎・褥崎は九十九島の入り組んだ小半島で面積・生産性に限界があったこと、さらに

表4 移動の背景

	条件不利性	均分相続の形態やその結果	過剰人口（およびその結果）
外海（出津）	半島・山地が海に迫る傾斜地	農地の細分化のため生活困難	全国平均を大きく上回る出生率
黒島	馬の牧場跡・仏教集落の農家の小作	農地の細分化の進行	島内の仏教世帯を上回る世帯員数
折島	小離島。島の中央は平地	狭小地のため農地の細分化が極度に進行	明治期、島購入後に世帯の増加
神崎・褥崎	馬の牧場地跡・起伏のある小半島	草分け世帯の場合、農地を配分	生産基盤の転換後、分家・来住世帯が増加する
平戸島北部（上神崎）	馬の牧場跡・水には恵まれる	本分家で農地を耕作する。所有形態にこだわらない	対岸の田平地区・産炭地等に移住
平戸島中南部	平地。新田開発および開拓地	紐差中心地区は小作地等	非常に多い幼児洗礼者
法光坊	開拓地。台地で水利の問題	子ども世代への農地の配分（娘を含む）	分家が数多く創出される
新田原	大地主からの借地（開墾）・小作等	農地の配分。細分化と兼業化が進行	戦後世代が急増する

平戸島への信徒の移住は後発で小作等が多かったこと、第4次移住地の法光坊・新田原は台地の開拓地で、従来の農業生産には適していなかったことが判明した。

② 均分相続

次に、均分相続に関して、外海地区の場合、出津教会のマルコ・マリー・ド・ロ神父の「零細な田畑が子供に分割されていよいよ零細化する」（外海町史 596-7頁）という発言の中に、均分相続の慣行とその結果の農地の細分化および配分する農地の不足する状況が表出されている。

また、第1次移住地の黒島や五島（折島）の場合、神戸大学経済経営研究所および谷口護・菊池成明の調査を通して、生産地の細分化が極限的であったことが確認されている。第2次移住地に関して、平戸島上神崎の場合、聞き取り調査を通して、地権を変更することなく本分家が共同で耕作している状況、さらに第4次移住地に関して聞き取り・世帯調査を通して、子ども世代に農地が配分されている状況が明らかになった。

③ 過剰人口

信徒の居住地の状況に関して、ド・ロ神父の「この村は土地が今日既に人口に比べて狭過ぎるのに数十年後にはどうして暮すつもりか、一日でも早く移住した方が得だ。遠くに行けないなら近くに移住することが出来るだろう」（外海町史 597頁）という発言、さらに外海地区の出津教会の幼児洗礼者数から当時の平均出生率を大きく超える出生率を推定することができた。

また、第1次移住地の黒島に関して、兄弟等の傍系親族の同居が一般的であった仏教集落の世帯よりも直系親族の信徒世帯の方が平均世帯員数の多い状況が判明した。五島（折島）の場合、信徒による島の購入後、分家世帯の創出によって島内の世帯数が増加したことが判明している。

第2次移住地の平戸島等では、明治中期以降、回宗者（成人洗礼者）や新たな来住世帯ではなく、信徒の自然増によって大幅に信徒数が増加したことが判明した。その結果、「耶蘇教特有の開墾をなし殆んど余す所なく耕せられたるを以て将来嘱望なし而して一面には此教徒すでに稠密なるため陸上収穫のみを以て生計を維持困難」（紐差村郷土誌 201頁）という状況に陥る。一方、第4次移住地の新田原・法光坊等では、急増した子ども世代が都市化・工業化の進行によって非農業の世帯として集住地に居住・還流する傾向が明らかになった。

④ 集団的移動を生じた社会的要因

このように、信徒世帯の間で均分相続の慣行が継承されたこと、さらに明治以降の非常に高い出生率に伴う多子傾向と結合した結果、規模の零細な世帯が数多く発生することになったといえる。さらに農業生産に関して山間地・傾斜地・台地・荒地等であったこと、その多くが水利にも恵まれない条件不利地であったこと、その上、開拓移住地の場合は開墾作業が必要であったこと、小作の場合は非常に高い小作料であったことから、条件不利地における低い農業生産性であったことが明らかである。こうした低生産性が、居住世帯の他出を促進した社会的背景

表5 移住後の地域状況(1)

移住地の状況	市町名		新上五島町		佐世保市		長崎市		平戸市				佐世保市		平戸市		松浦市		大村市		佐世保市		
	地区・集落等名	曾根	折島	黒島	神ノ島	大山・善長谷	中南部(紐差)	中南部(紐差周辺)	中南部(山間地)	北部(上神崎)	神崎・禰崎	平戸	田平地区	平戸	西木場	竹松	相浦	集落地の規模	信徒のエリア的状况(周辺の信徒集落等)	集落地の規模	信徒のエリア的状况(周辺の信徒集落等)	集落地の規模	信徒のエリア的状况(周辺の信徒集落等)
居住地の状況	集落地の規模	-	小	-	小	小	大	小	小	大	小	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
	信徒のエリア的状况(周辺の信徒集落等)	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
居住展開	集落地の規模	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	分節化	-	-	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
生産状況	分家の創出	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	その後の来住世帯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地域変化	分家・来住世帯の居住地	下側	-	-	小瀬戸・木鉢	下側	中心	-	-	平戸に近い場所	-	-	-	-	西大村・丘陵地	相浦地区	相浦	相浦	相浦	相浦	相浦	相浦	相浦
	土地の所有	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
地域変化	生産基盤の転換	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	副業・出稼ぎ・兼業	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
地域変化	職業の多様化	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	都市化・工業化	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

凡例：◎＝該当、○＝ほぼ該当、△＝やや該当、▲＝あまり該当しない、×＝該当しない

の一つであったと見て間違いのないだろう。しかし、多くの信徒の居住地では、高い出生率・均分相続に起因する信徒・世帯数の増加が一定以上に跳ね上がっていないことが判明した。

このちぐはぐな信徒・世帯数の状況こそ、条件不利地区における零細規模の信徒世帯の他出を裏づけるものといえよう。すなわち条件不利性・均分相続・過剰人口(世帯)が絡み合った他出要因が、信徒の居住地および各世帯に恒常的で大きな他出圧力になったことは確かである。しかし信徒集落の消滅は、第2次世界大戦後の山間の開拓地や過疎対策特別措置法の対象集落等の若干で生じたに過ぎない。つまり恒常的な他出圧力は信徒世帯を消滅に向かわせるものでなく、集落内に残存世帯と他出世帯の二つタイプの世帯を生み出すものであったといえよう。

とはいえ、こうした他出と残存の二つのタイプの信徒世帯は、長男相続や末子相続によって制度化されたものとは見られない。さらに相続形態に関する議論以上に興味深いのは、長崎の半島・離島の信徒の地区・集落に恒常的に残存世帯と他出世帯が生じたこと、他出世帯の集団移住の結果、信徒世帯の居住地が長崎県内に広がったことである。

移動の社会的特徴

長崎の半島・離島の信徒の集団的移動の社会的特徴に関して、営農志向および連鎖的移動という特徴はすでにふれている。事例調査を通して、世帯単位の移動であること、複数の社会関係で結ばれた集団であること、さらに集落地外の社会が関与することが明らかになった。

① 挙家離村

信徒の集団的移動が挙家あるいは世帯の多数者であったことは、相当数

の資料によって裏づけられた。その一部の地区・集落の草分けを紹介すれば、第1次移住地の場合、五島内の移住地の折島に白浜家等10戸、長崎市の善長谷に7家族と2独身者、平戸島中南部の木場には10数世帯、獅子の主師（山野）に8～10世帯であった。また第2次移住地の場合、平戸島北部の上神崎の第1陣（草分け）6家族（7世帯）、佐世保市神崎の第1陣（草分け）6家族、褥崎の第1陣（草分け）8家系（10世帯）であった。第3次移住地の場合、田平の黒島からの第1陣3世帯・外海からの第1陣3家族、大村市竹松に初期移住の9世帯、第4次移住地の場合、新田原に初期移住の約20世帯、佐世保市相浦の浅子への初期の5世帯、相浦の大崎への初期の6世帯、崎辺の天神の2世帯、宮崎市田野（法光坊）の2世帯、佐世保市烏帽子の1家族2世帯等であった。こうした記録から、信徒の移住のほとんどが世帯単位であったといえるだろう。

さらに平戸市（北松浦半島）の平戸口教会の信徒記録から、明治後期以後の移動および家族形成の典型が、平戸島・五島からの挙家離村の世帯および田平地区田平・平戸口の世帯の分家や挙家離村の世帯であったと推定することができた。また福岡市城南区の茶山教会の信徒記録によって、上五島で結婚後、上五島で誕生した子ども世代とともに福岡市に移住した世帯が初期の居住の典型的な移住の形態であったと推定することができた。

② 社会関係（類縁関係・親族関係・地縁関係）の発動

カトリック信徒（江戸期はキリシタン）の集団的移動が類縁（宗教）関係を基盤の一つとしているのは当然として、他の社会関係も成員の結合の基盤になっていることが明らかになった。

若干の事例をあげれば、第1次移住地の長崎市大山・善長谷の信徒世帯はそれぞれ外海の集落（黒崎村永田・東堅山）と地縁関係で結ばれ、このうち大山の場合は、最初、同郷の世帯の移住地である伊王島・善長谷への連鎖的移動をめざしている。平戸島中南部の田崎の移住世帯の場合、ほとんどが山頭新エ門の親族といわれる。第2次移住地の佐世保市神崎・褥崎の場合、初期の移住世帯の多くが五島出身である。上神崎への初期の移住世帯は五島・黒島で、黒島の場合は黒島内の同じ集落からの移住が多いことが特徴的である。

第3次移住地の平戸市田平の世帯の場合、黒島・外海と同郷関係で結ばれ、大村市竹松・西大村の世帯への初期の移住世帯の場合、外海・黒島等と同郷関係で結ばれている。第4次移住地の宮崎市田野（法光坊）の場合、外海・佐世保市相浦等と同郷関係さらに草分け世帯とその後の世帯の間が親族関係で結ばれている。福岡市城南区茶山の場合、先住の世帯とその後の来住世帯が親族関係で結ばれていたことが判明した。佐世保市烏帽子の場合、平戸市紐差の草分けの世帯の移住後、その親族関係・同郷関係で結ばれた世帯が後続していること、佐世保市曾部ヶ崎の移住世帯も褥崎の2つの家系に属する世帯の移住であったことが判明した。

このように、信徒の移動は社会関係の重複、すなわち強固な関係性で結ばれた世帯による集団移住であったといえよう。

③ 外部の関与・社会資源

また、江戸期、旧藩・国の政策等の外部の政策が関与していたことも特徴の一つである。江戸後期の長崎市外海（大村藩領）から五島への移住が五島藩の政策に基づくことは広く知られているが、第1次移住および第2次移住が平戸藩等の経済政策（開拓・新田開発）に基づく移住であることが明らかになった。また佐賀（深堀）藩の開拓地や平戸藩の山間地・牧場地に藩の許可する移住が存在したことも判明し、数多くの中小規模の移住を含めて、実は、江戸期の信徒の移住が旧藩の認可のもとにおこなわれたことが明らかになった。

また、明治中期以後の移住の場合、類縁関係等に基づく社会資源（外国人神父・修道会）の関与が明らかになった。すなわちド・ロ神父、エミール・ラゲ神父の外国人神父や日本を管轄していた外国修道会（パリ外国宣教会）が主導する第3次移住地の平戸市（松浦半島）の田平・大村市竹松・平戸市（平戸島中南部）の木ヶ津（坊主畑）への信徒の移住や第2次移住地の平戸市（平戸島）上神崎への五島の信徒の移住におけるA・ブレル神父の土地購入資金の貸与である。また第4次移住地の行橋市新田原における同郷の教役者による紹介・勧誘であることが明らかになった。

さらに、大正・昭和期以後の信徒の集団的移住には、国の地域政策（開拓政策・過疎対策）が関与していたことが判明した。すなわち宮崎市田野（法光

坊)・福岡市西区能古島(大泊)等への移住は大正・昭和期の開墾助成法の利用であり、第二次世界大戦後の開拓地(佐世保市牟田の原・烏帽子)や開放地(旧軍用地)への移住は自作農創設特別措置法に基づくものである。

こうした事例から、信徒の移動の多くは類縁(宗教)関係を基盤にしなが、旧藩や国の政策といった外部社会や外国人神父・外国修道会という信徒の社会関係資本を利用・活用して行われたものであるといえよう。

移住地の状況

さらに、事例調査を通して、長崎の半島・離島出身の信徒の移住地の地域状況の多様性が明らかになった。実際、表5および表6の移住地の状況の移住地の規模・信徒の居住エリアの状況を見ると、移住地の規模は小規模から大規模まであり、さらに事例調査地の周辺に居住展開した信徒の状況もさまざまであった。こうした状況を若干ながら整理してみたい。

第1次移住地では、次の状況が判明した。まず五島の場合、五島内の周辺地区に信徒の集住地が点在し、さらに各集落が各地区の一部を構成している状況である。また佐世保市黒島の場合は、島の中心地区等をのぞく各集落に信徒の居住が展開している。

一方、長崎市の場合、移住が半島・山間地・島嶼に小規模に生じ、その後、周辺に信徒の居住や移住が展開している。

第2次移住地では、次の状況が判明した。まず平戸市中南部・北部の場合、規模の大きい開拓地・新田(小作地)等が存在し、エリア全体に居住が展開し、さらに地区の中心への居住も進展する状況である。一方、中南部の山間地や佐世保市北松浦半島の小半島の神崎・褥崎は小規模で信徒の居住はその周辺にとどまる。また平戸島中南部(山間地)の集住地も小規模である上、周辺に信徒の居住は展開していない。

第3次移住地では、次の状況が判明した。田平地区田平の場合、信徒の移住地の規模が大きく、さらに周辺の平戸口・西木場にも信徒の居住が展開し、信徒の居住するエリアが広大なことである。また大村市竹松も西大村・丘陵地に信徒の居住が広がり、第二次世界大戦後は旧軍用地等にも信徒が移住し、信徒の居住エリアが拡大している。一方、佐世保市相浦地区の場合、相浦の対岸の浅子に信徒が居住し、その後半島先端の大崎および新田の広がる大湊および中心の相浦に分散的に居住が展開する。

第4次移住地では、次の状況が判明した。すなわち茶山を除き、いずれも開拓地であったことである。そのうち法光坊および能古島大泊は移住地内に居住

表6 移住後の地域状況(2)

		長崎県外			
		宮崎市田野 (法光坊)	福岡市能古 島(大泊)	行橋市 新田原	福岡市城南 区茶山
移住地の状況	集住地の規模	-	小	-	小
	信徒のエリア的居住状況(周辺の信徒集落等)	限定	限定	行橋・築城	城南区
	集落・地区等の信徒比率(大)	○	△	○	△×
	分節化	-	-	-	-
居住展開	分家の創出	◎	◎	◎	△
	その後の来住世帯	○	○	◎	◎
	分家・来住世帯の居住地	地区内	地区内	周辺	周辺
生産状況	土地の所有	◎	◎	小作地含む	小作地含む
	生産基盤の転換	○	×	○	◎
	副業・出稼ぎ・兼業	-	○	◎	-
	職業の多様化	○	×	○	◎
地域変化	都市化・工業化	◎	○	◎	◎

凡例：◎=該当、○=ほぼ該当、△=やや該当、▲=あまり該当しない、×=該当しない

が限定する傾向にあり、一方、新田原は築城等に展開している。非農家の信徒世帯に関して、新田原の場合、行橋市内、茶山で城南区内等に展開していることである。

このように、移住地の地域状況は多様であるものの、いずれも条件不利地であることは共通する。しかし条件不利性のうち水利に乏しい原野・台地等への開拓・営農移住の場合は、集住地および周辺に信徒の居住が展開する傾向にあるといえよう。一方、山間地の移住地の場合、その地理的制約のためか、小規模かつ周辺への信徒の居住エリアの展開は見られない。

信徒比率および信徒の多様性・分節化

信徒の移住地のうち江戸期の第1次移住地の五島・黒島および長崎市の半島・山間地の集落・地区の場合、集落・地区に占める信徒の比率は相当に高い傾向にある。一方、第2次移住地の平戸市中南部・北部の場合、信徒と同時期に移住した非信徒の世帯、明治期にカトリックに回宗（回帰）しなかった世帯および既住の世帯との混住傾向が見られた。ただし神崎・褥崎の場合、集落規模の小さい開拓移住地で、神崎では非信徒世帯の改宗も生じ、これらの小移住地での信徒比率は非常に高い。

第3次移住地の場合は、非信徒世帯の既住地区・集落に信徒が後発的に移住する傾向にあったため、地区・集落における信徒世帯数は半数以下の場合が多い。例えば、平戸市田平地区田平の場合、「近隣はみな信徒ばかり」の外海・黒島・五島出身の世帯にとって、「近隣は異教徒ばかり」（浜崎勇 30 頁）という混住状況にあった。第4次移住地の場合、比較的信徒比率が高いものの、都市化・郊外化の進行によって非信徒の居住が広がる傾向が見られる。

さらに、移住地の規模別では、大規模な移住地の場合、さまざまな出身地の信徒が混住する傾向が見られる。一例をあげれば、黒島の場合、外海・上五島・生月・浦上からの移住世帯、平戸市中南部の宝亀（京崎）の馬の牧場跡地の場合、外海・黒島・五島からの移住世帯、北部の神崎の牧場跡地の場合、黒島・五島からの移住世帯である。一方、小規模の移住地の場合、特定の地区・集落の世帯が移住する傾向にある。

複数の出身地の信徒世帯が混住する場合は、移住

の地区・集落内でさらに出身地を単位とした居住の分節傾向が現れている。黒島の場合、出身地別に集落が形成されるだけでなく、黒島からの他出も集落単位という傾向が見られた。平戸島北部の上神崎や教役者主導の平戸市田平地区田平も出身地を単位に集住する傾向が見られた。

移住地における居住の展開

いずれの移住地でも移住後の世帯に分家が創出され、分家の創出によって移住地の世帯・人口が増加していったことが判明した。

① 移住地の規模と時期

大規模な移住地や移住地の周辺の新たな開拓地への入植や農地（小作地）の利用が可能な場合、世帯の増加が著しいことが判明した。その一方、小規模の移住地の場合、条件不利性・均分相続・多子の複合的な背景に起因する生産性の低い零細規模の世帯の出現と他出が恒常的に発生するため、世帯数は大きく増加しない状況が判明した。

後発の世帯の移住に関して、平戸市（平戸島北部・田平地区）・松浦市西木場、大村市等への来住世帯の場合、初期の移住世帯と同様に営農目的であることが判明した。その一方、都市化・工業化が進行した長崎市の場合、半島・山間地の当初の移住地の周辺への新たな移住世帯は非農業の世帯に転じる。また佐世保市（神崎・褥崎）の場合、来住世帯は、集落の生産基盤の転換によって生まれた漁業（漁労）関係の職を求める世帯に転じたことが判明した。

② ド・ロ神父主導の開拓移住地のその後の展開

ここで、明治中期にド・ロ神父が主導・関与した平戸市田平・木ヶ津（坊主畑）・大村市竹松の3地区を比較してみたい。いずれも神父等が購入した条件不利地への開拓移住で、初期の移住世帯は20世帯前後である⁽¹⁾。田平・坊主畑が給与、竹松は給与・貸与（小作）・児童救護院所有の農地での就農の複合である。

移住後の生産活動は、田平が農業と漁業を含む多様な副業、竹松が長崎教区（外国宣教会）の所有地の小作と施設の農地の農作業、坊主畑が開墾と漁労である。その後の居住展開に関して、田平の場合、周辺の田平地区（永久保・野田・岳崎等）および松浦市西木場等に分家および新規の移住世帯の居住が広がり、昭和初期に2千人を超える信徒数に達する。

また竹松の場合、隣接する西大村に居住が広がり昭和初期に100世帯を超えている。その後丘陵地に新規移住の世帯の居住が広がり、さらに第二次世界大戦後、旧軍用地に分家および新規移住の農業世帯が生じている。一方、坊主畑の場合、高度経済成長期まで分家等の世帯の増加で、初期の3倍の世帯数に達するものの、しかし坊主畑には初期の移住後の連鎖的移動は見られない。

生産状況

① 土地所有

移住した当時の土地の所有状況は、十分に解明することができなかった。しかし第1次移住および第2次移住のうち江戸末期までの藩の開拓政策等による移住の場合では、自作地であったと見られる。一方、民間の新田の場合、開発者の農地の小作であったと推測される。第2次移住（明治期）・第3次移住、そして江戸期の移住地への後発的な移動の場合、購入地（自作地）と小作地が混在する状況にあったことが判明した。平戸市上神崎の場合、五島出身世帯は購入地、黒島出身世帯は小作地である。平戸市中南部の場合、畑作が自作地、米作が小作地という世帯が多かったと推定することができた。

また、第3次移住地のうち外国人神父等の主導する開拓地の場合、当初の世帯が自作地、その後の来住世帯には自作・小作の双方が混在している。第4次移住地のうち国の開拓政策に基づく移住は自作地である。一方、教役者が関与する行橋市新田原等への開拓移住および福岡市茶山等は小作地であったことが判明した。

さらに自作農創設特別措置法の農地改革によって、多くの移住地の世帯の自作地が増加したことが確認できた。

② 生産基盤の転換と副業・兼業

信徒の移住地の中に、生産基盤が農業から農業外に転換したところが多く見られた。そのうち第2次移住地の佐世保市神崎・禰崎は明治中後期に水産業に転換し、その結果、新たな世帯が移住して来る。表示していないものの、第4次移住地の佐世保市相浦（大崎）の場合、昭和期に工業化（工場の進出）に伴う雇用の創出および漁業従事で生産基盤が大きく転換している。一方、都市化・工業化に伴う非農業世帯の来住によって職業状況が多様化した集住地

が、長崎市・佐世保市・大村市等の都市地域に多く見られる。

いずれの移住地でも、従来の低い農業生産性をカバーするために、移住当時から漁業等を副業・兼業としている。聞き取り調査等から、主として、女性が農業に従事し、男性が漁業に従事する性別の分担であったことが確認できた。また大規模移住地の平戸市田平地区の場合、同郷の移住者の間で同じ副業に従事する傾向にあったことも明らかになった。

地域変化と職業の多様化

最後に、長崎の半島・離島出身の信徒の移住地の地域変化の状況である。都市化・工業化の展開が顕著な移住地は、事例調査では、長崎市・平戸市（平戸）・大村市・佐世保市で、長崎県外では、宮崎市田野（法光坊）・行橋市新田原・福岡市城南区茶山である。

これらの集住地では、都市化・工業化等に伴う非農業の分家世帯の創出によって世帯の増加が生じ、さらに後発移住の信徒世帯が多く来住している。信徒世帯の連鎖的移動によって来住した世帯と初期から住む信徒の間で類縁関係（宗教関係）が保持され、一部、親族関係・同郷関係で結ばれているのが特徴である。しかし同業関係にない非農業の世帯が増加し、職業を軸とする分化が信徒の間で生じていることが判明した。さらに非信徒世帯の来住も増加する。その結果、集住地における信徒比率も低下する傾向が明らかになった。

以上、長崎の半島・離島出身の信徒世帯の移動に関する一連の研究における諸想定は、事例調査を通しておおむね立証することができたといえよう。加えて、想定していなかった状況も明らかになった。一例をあげれば、産炭地において信徒世帯の成員と離家離村の信徒の間の家族形成が一定数存在したこと、高度経済成長期以降の学校を窓口とした子ども世代の移動が定着する直前、教会を窓口として移住地での信仰を保証する等の就職あっせんが存在したことである。

3. 日本の近代化と長崎の信徒の開拓移住

ところで、江戸末期以後の長崎の半島・離島の信

徒の状況および世帯を単位とした営農志向の集会的・連鎖的な移動は、明治以降の日本の近代化の中で、どのような社会的特徴をもつ移動として位置づけられるだろうか。

本節では、まず明治以降の日本社会の時代趨勢（近代化）の社会的特徴を概括した上で、長崎の信徒の状況および移動に垣間見られるモダニティの一端を析出する。次に長崎の半島・離島出身の信徒が保持するコミュニティ志向性に関して、ヨーロッパから新大陸への（開拓）移住の状況を参照しながら、その社会的特徴を輪郭づける。さらに日本の都市化・産業化が進行する状況下の信徒の営農志向性を検討していきたい。

長崎の半島・離島の信徒とモダニティ

長崎の半島・離島出身の信徒の移動は、前節でふれたように、農地の確保が可能な条件不利地において一定規模の営農の実現をめざすものであった。つまり日本の近代化を主導する都市をめざすのではなく、農村間の営農志向の移動であった。そのため明治以降の日本社会の展開を前近代—近代としてとらえれば、信徒の移動は前近代的・伝統志向的な営みに位置づけられるかもしれない。

しかし、そう簡単に理解できるものであろうか。ここでは社会学における近代化・日本の近代化に関する視点・観点を簡潔に整理した上で、長崎の半島・離島出身の信徒の集団的移動を近代性（モダニティ）に関する若干の視点に依拠することで輪郭づけていきたい⁽²⁾。

① 日本社会におけるモダニティ

まず、近代化（モダン）についてである。「近代」とは、富永健一によれば、「近代的」になることである。その上で富永は、「近代的」の意味が歴史上の時代区分としての「近代」と社会科学的な概念として抽象度の高い「近代的なもの」に区分できるといふ。すなわち西洋史上の歴史事実としての前者の近代から抽出された近代的なものが後者であるという（富永健一 28 頁）。

しかし、非西洋社会の近代化は、富永によれば、西洋社会の近代化の展開と相違するものである。すなわち西洋社会の近代化の過程は、まず社会的近代化（氏族の消滅・自治都市の隆興）と文化的近代化（ルネッサンス・宗教改革）として生じ、遅れて政

治的近代化（市民革命）が生じ、最後に経済的近代化（産業革命）が生じたといえるからである。一方、非西洋社会では、その展開は西洋と相違し、多面的・多様であるという。

こうした多面的・多面的な展開状況を把握するために、富永は近代化の規定要因と近代化が生じる社会領域の区分が必要であるという。こうした観点から富永は、まず非西洋社会の近代化を規定する要因として、伝播可能性・動機づけ・コンフリクトを指摘し、次に近代化の生じる社会領域として、経済・政治・狭義の社会・狭義の文化の4つの領域に区分する。この設定によって、富永は、近代化を規定する要因がいずれの社会領域に親和性があるかが判定でき、日本社会の近代化の社会的特徴が明らかになるといふ。

実際、日本社会に対する経験的知見に基づいて、富永は、日本を含む非西洋社会における近代化の伝播可能性に関して、経済>政治>社会 - 文化の領域の順に伝播するとし、近代化の動機づけに関して、経済>政治>社会 - 文化の領域の順で浸透するとし、近代化に関するコンフリクトの発生に関して、社会 - 文化>政治>経済の領域の順で発生しやすいと見る。この分析によって、富永は、日本の近代化の過程が西洋の近代化の時間的展開とは逆方向の展開であったと結論づけている（富永 58-66 頁）。

② モダニティの推進メカニズム

一方、アンソニー・ギデンズによれば、近代化のダイナミズムは、時間と空間の分離・脱埋め込み・再帰的近代化と再秩序化という社会的特徴を帯びるといふ。このうち時間と空間の分離とは、目の前にいない（対面的相互行為の状況にない）他者との関係性が高まることであり、脱埋め込みとは、こうした時間と空間の分離に関係しながら、対面的世界の外部の諸要因と密接に関連する現象をさすものである（ギデンズ、A 30-63 頁）

③ 信徒とモダニティ 1—カトリックへの回（改）宗

このようにモダニティの特徴を整理すれば、江戸期（幕末期）以後の長崎の潜伏キリシタンの生活は、モダニティとどのような関係していたと理解できるだろうか。

第1の関係性は、富永が日本社会との親和性が最も低い社会領域とする狭義の文化において関係していたことである。すなわち江戸末期・明治以降の長

崎の潜伏キリシタンのカトリックへの回(改)宗は、富永が非西洋社会では浸透が最も遅い狭義の文化・狭義の社会領域のモダニティの一つに位置づけられるからである。

明治以降、経済的・政治的領域の近代化は都市部を中心に進行するものの、西洋文化・教育は、教養として主として社会的上層の子女の間でわずかに受容されるにとどまる。とりわけキリスト教はさらにその一部で受容されたにすぎず、伝統的な家の信仰との間で激しいコンフリクトを生じさせる傾向にあった。狭義の文化領域のモダニティは、都市地域におけるこうした状況と対照的に、いち早く長崎の信徒の間に浸透していたといえよう。

とはいえ、宗教以外の教養文化領域に関して、近代化の指標といえる教養・教育に関しては、明治期のカトリック改革派の司祭が「プロテスタントには、資産家、実業家、政治家、学者、官吏など『中等以上の人』が多いのに対して、カトリック教会は、世間一般では『島人山人無学文盲多くは田野生の愚夫愚婦の信徒のみ』と思われて軽視されている」(山梨淳 236・252頁)と指摘したように、モダニティの影響を見出すことは困難である。

第2の関係性は、江戸末期・明治初期の信仰選択(カトリック、仏教・神道、隠れキリシタン)が、潜伏キリシタンの集落では主として集落単位(少数の集落では家単位)で選択されていたことである。すなわち狭義の文化領域のモダニティの受容が、狭義の社会領域における前近代的な背景の中で実施されていて、いわば近代と前近代が混在するちぐはぐな社会状況にあったといえよう。

④ 信徒とモダニティ 2—長崎に広がったカトリック信仰とモダニティ

このように江戸末期以後に日本で宣教されたカトリシズムを狭義の文化的モダニティの一つに位置づけたことに対して、当然、反論があるだろう。おそらく反論は、富永の議論の中で、政治領域・経済領域における近代化に先立つ文化領域の近代化として宗教改革があげられていることであり、またマックス・ウェーバーがプロテスタンティズムが資本主義の展開への寄与、少なくとも関連したと言及したことに代表できるものであろう。実際、ヨーロッパにおいてもカトリシズムは、反近代として位置づけられることが多い。

しかし、幕末期以後に日本で宣教されたカトリシズムは、宗教改革後のトリエント公会議等を経て諸改革が実施された後のカトリシズムであり、また外国人神父・修道会は西欧の最先端のモダニティを帯びてはいないにしても、少なくとも同時代人・組織としてモダニティの一端を帯びて、日本の社会(長崎の半島・離島)で宣教していたといえる。そのため、多くの長崎の信徒は、外国人神父や修道会を通して、狭義の文化的モダニティをはじめとしたモダニティの影響を受けていたと見て間違いはないだろう。さらにいえば、こうした外国人神父を介してモダニティに接するという状況は、長崎の信徒がギデنزの指摘する脱埋め込みのモダニティ・メカニズムの中に組み込まれていたといえよう。

その一方で、この当時の日本で宣教されたカトリシズムが、厳格主義的として知られるヤンセニズムの影響下にあったことも事実である。すなわち「フランス人宣教師たちの中にも、この考え方の影響があったため、幕末からの日本の再布教時代にかれらが司牧した長崎の信者たちもその感化を受けることになった」(クリスチャン・M 128)といわれる。

⑤ 信徒とモダニティ 3—ド・ロ神父等を介した展開

とはいえ、長崎の半島・離島出身の信徒の生活のモダニティは、文化(宗教)領域において外国人神父および修道会を介した時間と空間の分離および脱埋め込みによって浸透したと見ることができよう。

さらに、こうしたモダニティは狭義の文化領域を超えて他の領域でも浸透していくのが特徴的である。例えば、婚姻に関して、外国人神父の教会法に基づく結婚の指導を通して、従来、行われていた親族者間の婚姻(村内婚)から村外婚が急速に広がっていく。この状況は、狭義の社会的モダニティの浸透である。親族関係が集落外に広がった結果、集落を単位にすることが多かった信徒の集団的・連鎖的移動に集落外の親族が参加することになる。

また、ド・ロ神父の場合、外海地区の農業の近代化を指導したことで著名である。すなわち外国(フランス)野菜の種子や農機具の輸入を行ない、農機具の開発にも取り組んでいる。さらに通称、ド・ロさまそうめんやパン等の農産加工品の開発や長崎の外国人居住地区等での販売を進めている。また医療・福祉領域に関して、長崎で発生した伝染病への薬品の提供を含めた医療的対応や寡婦や孤児のた

めの授産・児童施設の設定、さらに信徒への開拓移住を推進し、多面的な領域において、西欧のモダニティを外海地区や長崎県内の信徒の生活に浸透させている。

とはいえ、長崎の半島・離島の信徒の移住地の中には、外海地区出津や平戸島紐差等のように外国人神父・修道会と強いつながりをもたない地区・集落が存在したことも事実である。

長崎の信徒の意図的コミュニティ志向

長崎の半島・離島出身の信徒に浸透したモダニティは、日本の都市住民・都市社会が経験したモダニティとかなり相違する内容のものであった。一方の農村間の営農志向の移動および移住地におけるコミュニティ形成志向という社会的特徴は、一般的に前近代性を帯びると見られるものである。

しかし、こうした長崎の半島・離島出身の信徒の集団的移動は、17世紀以後のヨーロッパのプロテスタント諸教派のアメリカやオセアニアへの移住との類似性・共通性を何かしら想起させるのも事実である。

① 新大陸への移住

信仰の自由を求めてイギリスからアメリカに渡ったピューリタン以来、多くの教派のプロテスタントが新大陸に開拓入植し、実際、クエーカー教徒の設立したフィレオ（友愛）の町から発展したフィラデルフィア等の都市やアーミッシュ等の小規模の宗教コミュニティが設立されている。またスコットランド長老派の移住者によってニュージーランドでダニエデンが形成される。そのため初期の新大陸への移住は、文化的モダニティ（宗教改革）および政治的モダニティ（信教の自由）を帯びた移住と位置づけられるかもしれない。

しかし、南欧・北欧・東欧からの後発の移住に関しては、出身国における経済的状況が主要な要因とされている。こうした移住地の一つ、ボストン市のウエストエンド地区を調査したH・G・ガンズによれば、最初の定住者がアイルランド系移民で、その後、イタリア系世帯が半数弱を占めるイタリア系移住者を主とするコミュニティに転じている。

しかし、こうした後発の移住地でも、アイルランド系移住者の定住以降、カトリック教会が地域の最も中心の機関として、多くの地域組織・地域の学校

と関係を保持し、宗教領域にとどまらず地区の生活全般に関与する制度としてコミュニティの維持に関与していたとされる（ガンズ・H・J 25-29頁）。

② 意図的コミュニティ志向性

新大陸の開拓入植地では、このように初期の移住地だけでなく、後発の移民の移住地でも地域の住民の間で信仰と生活が一致する状況が見られるという特徴がある。こうした特徴をもつコミュニティは、「意図的コミュニティ（intentional community）」と呼ばれる⁽³⁾。とりわけ北米やオセアニアの意図的コミュニティの場合、民族関係が住民間の一致の基盤の一つを形成している。

しかし、一般に、意図的コミュニティは宗教と職業（同業）という二つの類縁関係で結ばれたものと見ていだろう。二つの類縁関係に親族関係が重複する地区・集落では、地域の人びとはより強固な関係性で結ばれているといえよう。

さらに、地縁関係を基盤に類縁（宗教・同業）関係、時として親族関係・民族関係等によって基盤づけられた意図的コミュニティでは、そこで生まれ育った信徒がコミュニティの社会関係や生活・文化を当然視し、内面化する傾向にある。そのため移住を余儀なくされた場合も、移住地で意図的コミュニティの再生（形成）をめざす傾向にあると推定されよう。

③ 長崎の半島・離島出身の信徒の意図的コミュニティ志向

実際、新大陸へのヨーロッパからの移住と意図的コミュニティの状況は、長崎の半島・離島出身の信徒の移動との間に類似点・共通点を感じさせるものである。とりわけ信仰の保持のための移動という一般的な認識をもつ人にとっては、初期の移住に類似性を見出すことが想像可能である。そうした類似性は全面否定できないものの、しかし調査事例の検証をへて、信徒の移動の背景を過剰人口（世帯）とする観点に立てば、出身国の経済的状況を背景とする東欧等からの後発的な移動に類似性を見出すことになろう。そうした場合には、長崎の半島・離島出身の信徒の移動が、文化的・政治的モダニティを帯びていたと見るのは困難である。

とはいえ、長崎の半島・離島出身の信徒の意図的コミュニティ志向性は、出身地での信仰の一致と同業（職業）関係を背景とし、初期の移住以後の多く

の新大陸への移住に類似性があるといえるものである。中でも開拓地での生活にこだわった小規模のコミュニティ、都市化の進行が及ばなかった農村コミュニティと類似性が強いと思われる。実際、アメリカでは、そうした地域が今日も信仰が強く保持されている地域といわれている。なおフランスの農村地帯において同様に信仰およびコミュニティが存続している状況に対して、エマニエル・トッドは、「ゾンピカトリシズム」と呼称している（トッド、E 74-78 頁）。

日本の産業化・都市化と長崎の信徒の農村間移動

最後に、長崎の半島・離島出身の信徒の開拓移住を明治以後の日本の経済的モダニティの展開に関連づけてみたい。

事例調査から判明したのは、明治中期以後、産業化・工業化・都市化の進行する都市の周辺に信徒が開拓移住したことである。例をあげれば、長崎市の半島・山間地や佐世保市の周辺地等の丘陵地等への営農志向の移動である。さらに昭和初期における諫早市への営農志向の移住等も含めることができよう。こうした信徒の移住地の多くは稲作に不向きであったものの、都市で増加する非農業人口（世帯）の野菜等の食料の生産供給の役割を果たしてきたといえよう。また佐世保市の北松浦半島の移住地や相浦地区大崎等における農業から漁業への生産の転換も、事例調査から都市人口（世帯）との食料供給と関係があったことが明白である。さらに長崎市外海地区では、明治初期から、ド・ロ神父の指導によって長崎市の外国人居住地の外国人や都市住民向けの野菜や農産加工品の生産が行なわれてきた。

こうした状況を日本の近代化に関連づければ、明治以後、産業化・都市化および国民の脱農業志向および都市移住という巨大な波が押し寄せながらも、実は、その波はさまざまな渦や逆流を生じたことと見ることはできるのではないだろうか。こうした逆流の一つを担うことになったのが、意図的コミュニティ志向の長崎の半島・離島出身の信徒の移動であり、

さらに第二次世界大戦後も食料増産の担い手として、逆流の一つを信徒の開拓移住が担ったといえないだろうか。

注

- (1) ただし、坊主畑の世帯数は、明治初期の移住世帯を含むものである。
- (2) 以下の整理は、高橋泉の整理を参考にしている。
- (3) 意図的コミュニティに関しては、M・B・マクガイヤ（104 頁）を参照のこと。

文献

- クリスチャン、M、キリスト教の 2000 年一初代教会から第二バチカン公会議まで一、オリエンズ宗教研究所、2004 年。
- ガンズ、H. J、都市の村人たち（松本康訳）、ハーベスト社、2006 年。
- ギデンズ、A、近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結—（松尾精文・小幡正敏訳）、而立書房、1993 年。
- 浜崎勇、瀬戸の十字架—田平のキリシタン 100 年の歩み—、田平カトリック教会、1975 年。
- 紐差村小学校編纂、紐差村郷土誌、1918 年。
- 神戸大学経済経営研究所、黒島—出稼ぎと移住の島—〔移民母村実態調査報告〕中南米叢書Ⅳ、神戸大学経済経営研究所、1961 年。
- マクガイヤ、M. B、宗教社会学（山中・伊藤・岡本訳）、明石書店、2008 年
- 外海町史、外海町役場、1974 年。
- 高橋泉、地域社会と「近代化」—柳田国男主導「山村調査」「開村調査」の追跡調査から—、まほろば書房、2005 年。
- 谷口護・菊池成明、集落移転前の折島における集落環境と生活—五島列島の集落に関する研究その 7—、日本建築学会大会学術講演梗概集、2003 年。
- 富永健一、日本の近代化と社会変動、講談社、1990 年。
- トッド、E、シャルリとは誰か？ 人種差別と没落する西欧—7（堀茂樹訳）、文芸春秋、2016 年。
- 山梨淳、二十世紀初頭における転換期のカトリック教会：パリ外国宣教会と日本人カトリック者の関係を通して、日本研究 44、国際日本文化研究センター、2011 年。